

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：13501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K14062

研究課題名(和文)知的障害のある子どもの「好み」の評価を中核とした支援方法の検討

研究課題名(英文) Examination of support method based on the evaluation of "preference" of children with intellectual disabilities

研究代表者

松下 浩之 (MATSUSHITA, Hiroyuki)

山梨大学・大学院総合研究部・准教授

研究者番号：30633789

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：知的障害のある人の支援に対して、本人の好みを客観的に評価する方法論について、我が国ではほとんど紹介されていない。本研究では、知的障害のある子どもの好みを活用した効果的な支援を学校で普及するための方法を明らかにすることを目的とし、文献の整理や特別支援学校教師に対する調査研究を実施した。

その結果、我が国の支援現場でも、子どもの興味関心をひきつける教材としての活用と、課題達成時の「ごほうび」としての強化子的な活用がある一方で、集団授業での活用の難しさが明らかとなった。また、ASD幼児に対して本人の興味関心に合わせた関わりだけでなく、好みに合わせて指導機会を設定することの有効性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

知的障害のある子どもに対して、教材やごほうびなどに本人の好みを活用して指導機会を設定することは、指導の有効性を高める効果があり、特別支援学校において各教師が積極的に実施していることが示された。そのうえで、個人の好みを集団での活動に導入することには困難さがあり、今後はその工夫点を整理することが必要であると考えられる。

また、好みの活用と関連した「トークンエコノミー法」などの支援技法について、理論的機序に関する誤解がある可能性が示唆され、応用行動分析学に関する教員研修の必要性が考えられた。

研究成果の概要(英文)：There are few introductions of the methodology for assessing their preference for support of persons with intellectual disabilities in Japan. In this study, it is intended to be effective intervention utilizing the preferences of children with intellectual disabilities to clear the way for widespread use in the school. Based on this purpose, we conducted a literature review on the preference-based teaching and surveys for teachers of special needs education schools.

As a result, it was shown that even in Japan, while there is utilization as a teaching material that attracts children's interests and as "reward" when accomplishing tasks, that is "reinforcer", it is difficult to utilize in group lessons.

Also, it was shown that it is effective not only to interact with ASD toddlers according to their interests but also to set teaching opportunities according to their preferences resulted from evaluating through objective preference assessment.

研究分野：特別支援教育

キーワード：知的障害 好み 支援 応用行動分析

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

近年、知的障害や発達障害のある子どもや認知症高齢者への支援として、本人や家族を中心としたパーソン・センタード（本人中心）の支援プログラムを検討することが主流となっている。特に海外の研究では、知的障害のある人に対して本人中心の支援を実現するために、その人の「好み」（*preference*）に注目して支援プログラムを実施することや、本人が支援プログラムを自己選択、自己決定できるようにすることが重要であることが指摘され、研究代表者らによってわが国にも紹介されてきた（園山，2010）。一方で、重度の知的障害のある子どもは、選択し決定することや、自分の意思を相手に伝えることに困難を抱えていることが少なくない。そのような場合、本人の好みを把握することも困難となり、保護者や支援関係者が本人の好みを見立て、代弁するのが一般的である。しかし、海外の研究では、関係者の見立てた好みと本人の実際の好みは異なっている場合があるという指摘もあり、支援プログラムが本人の希望に沿っているのかという点が不明確になりがちである。そこで、本人の好みや思いを内的事象としてではなく、外的環境に働きかける行動として客観的に捉えることが重要となる。そのためには、行動を周囲の環境との関係から客観的に捉える応用行動分析学（ABA）の枠組みによって子どもの好みを評価することが、特に有効であると考えられる。

前述のとおり、本人の好みを客観的に評価する方法については、これまでに海外で多くの研究がなされ、Cannellaら（2005）によって整理されている。しかし、わが国ではその方法論についてほとんど紹介されておらず、実践研究において好みに関する記述が見られないことが少なくない。また、松下（2015）は知的障害特別支援学校の教員を対象に、実施している好みの評価方法や好みを活用することの教育的意義などに関して質問紙による予備調査を実施した。その結果、客観的な評価の実施は少ない一方で、面談や連絡帳を通じた主観的な把握を行っていること、結果を記録したり指導計画に反映させることは少ないことなどが明らかとなった。また、「好み」という用語について、好みのもや活動の提示を「ごほうび」としてのみ捉え、学校教育に「ごほうび」は不要だという回答も見られるなど、好みを活用した支援についての誤解があることも明らかとなった。そこで、本人の好みを踏まえた本人中心で効果的な支援を実施するためには、現場の支援者が好みの評価から支援への活用まで円滑に実行可能な、簡便なアセスメントを中心とした支援パッケージを開発し、支援現場で普及させていくことが必要であると考えられる。

以上のことより、本研究では知的障害のある子どもの好みを活用した効果的な支援プログラムをわが国の実践現場で普及するための方法を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の目的

以上のことより、本研究では知的障害のある子どもの好みを活用した効果的な支援プログラムをわが国の実践現場で普及するための方法を明らかにすることを目的とした。

まず、研究2では、支援者が実践現場で実施しやすい好みのアセスメントの方法論と、それにもとづいた支援プログラムの有効性や効率性を検討することを目的とし、知的障害のある子どもに対して実践研究を行うこととした。研究3では、わが国において支援者が実施しやすい好みの評価方法を用いた支援プログラムの普及と応用可能性を検討することを目的とした。そのために、それまでの研究において得られた知見をまとめ、支援者向けのテキスト作成と、研修会や質問紙調査を実施し、その有効性を検討することとした。

3. 研究の方法

本研究は、特に重度の知的障害のある子どもの好みを把握し、わが国の教育および福祉現場で実行可能でかつ効果的な方法論を開発し普及することを目的とし、以下の方法によって進めた。

(1) 研究1

好みのアセスメントの方法について、文献研究を行った。海外の先行研究を概観するとともに、国内の知的障害のある人を対象とした実践研究 603 編における方法の記述をもとに、わが国における好みのアセスメントに関する課題について整理した。

(2) 研究2

知的障害のある子どもの指導を担当したことがある教師 33 名を対象とし、教育活動における知的障害のある子どもの好みの活用について、①好みを積極的に活用しているか、あるいは活用しようとしているか、②好みを活用できると考える場面や内容、③好みを活用する際の課題、④好みを活用しやすくするために必要なこと、の 4 点に関して、それぞれ自由記述により回答を求めた。結果は要約し、主に担当する年代（校種）をもとに「未就学」「小学校段階」「中学校段階」「高校以上」の 4 段階に分けて整理した。

(3) 研究3

A 県内の、主として知的障害のある児童生徒が在籍する特別支援学校 4 校の教職員 342 名を対象として、質問紙調査を実施した。質問は、児童生徒本人の好みを評価する方法、好みの活用に関する項目から構成した。好みの評価方法では、系統的アセスメントを含むいくつかの方法をあげ、その実施や記録の有無のほか、実施の容易性や結果の信頼性について 4 件法で主観的評価を求めた。また、「好み」の活用については、その有効性や必要性、実施度、個別の指導計画への反映について 4 件法で評価し、好みを活用した指導実施における困難についても回答を求

めた。全ての質問項目について単純集計を行ない、各アセスメント方法の実施率などを算出した。

(4) 研究4

2歳0ヶ月のASD幼児1名(以下、A児)を対象に、個別相談での遊び場面を用いて好みのアセスメントを実施し、好みを活用した自然な文脈での支援による社会的行動変容における効果を検討した。A児は言語発達の遅れと、感覚の過敏性や特異性がみられ、母親以外の他者からの身体接触に対して激しい拒否反応を示していた。新版K式発達検査の結果、A児のDQは52(P-M:99, C-A:42, L-S:37)であった。

(5) 研究5

小学校1校および特別支援学校2校に在籍する全児童624名の保護者を対象に、児童の放課後の過ごし方に関する質問紙調査を実施した。質問項目は先行研究を参考に作成し、放課後に自由に行う活動とその時間、場所、相手のほか、習い事の利用やスマホの仕様の有無、活動中の様子や放課後の過ごし方に対するニーズなどから構成された。回答のあった409名を分析対象とし、校種ごとにクロス集計を行い群間の差を比較した。

4. 研究成果

(1) 研究1

日本国内で2015年までの5年間で刊行された603編の実践研究論文のうち、①知的障害やASDで話しことばによる意思の表出が困難である人を対象にしていること、②対象者に直接的な支援や指導を行っている実践研究であって、その具体的な方法および結果が明確に記述されていること、の2点を基準にして、分析対象論文を抽出したところ、分析対象として61編が抽出され、分析を実施した。その結果、好みのアセスメントの実施を本文中に明記している論文は26編であり、全体の42.6%であった。好みのアセスメント方法としては、行動観察によるものが16編(61.5%)、聞き取りによるものが12編(46.2%)であり、両者を組み合わせているものも含め、行動観察と聞き取りが最も多く用いられていることが示された。半数以上の論文には好みのアセスメントについて明記されていなかったが、内容から、本人の好みに配慮していることが推察される研究は多く、わが国では「好み」の捉え方が海外と異なっている可能性が示唆された。また、簡便なアセスメント方法の確立と支援現場への周知が必要であることが示された。

(2) 研究2

分析対象とした教師33名のうち全員が、知的障害のある子どもの指導において本人の好みを積極的に活用していると回答し、いずれの段階においても、子どもの興味関心をひきつける教材としての活用と、課題達成時の「ごほうび」としての強化的な活用が挙げられた。未就学や小学校段階などの低年齢の子どもについては、活動そのものに好みを活用している回答があったが、年齢が上がるとそのような回答がみられなかった。中学校段階以上では教科学習を集団ですめることが中心となり、個人の好みの活用について優先順位が下がると推察される。

また、「トークンがないと活動の意欲が持たなくなる」や「そればかりになってしまう」という回答も挙げられた。これは応用行動分析学(ABA)の基本的な枠組みである強化随伴性に関する基本的知識の欠如から生じる誤解であると考えられ、回答で挙げられていたトークン・エコノミー法についても、強化随伴手続きとしてその理論を理解して使用している教師が少ない可能性も示唆された。今後、教員研修やペアレントトレーニングを行うことにより、指導手続きとしてだけでなく、その根拠を十分に理解したうえで活用できるように普及していくことで、好みを活用した指導が促進される可能性があると考えられた。

さらに、進級時の引き継ぎや学校間における「縦の連携」についても、課題として検討する必要があると考えられた。すなわち、それまでの好みの変遷や、活用してきた場面や内容を引き継ぐことで、より発展的に「現在の」好みについて把握し、活用することが可能になる。そして、それを可能にするツールとして、個別の教育支援計画の内容を精緻化し、活用していくことの重要性が示唆された。

(3) 研究3

261名の回答を分析対象とし(回収率76.3%)、授業や休み時間中の行動観察(99.6%)や保護者との面談(98.1%)が多く実施されていることが示された。一方、ものや活動を具体的に提示する方法の実施は少なかった(11.9%)。また、全体的に、実施率は教員歴が6年以下よりもそれ以上の方が高いという結果も示された。アセスメント実施についての教師の自己評価としては、連絡帳や送迎時のやりとりからの把握や、授業中や休み時間の行動観察が実施しやすく、実際の好みとの一致度も高いという認識であることが示された。

指導や支援に本人の好みを活用することに関する有効性および必要性については、ほとんどすべての教師がポジティブな回答をしていた一方で、個別の指導計画への記述や反映についてはポジティブな回答が多くなかった。実際の指導場面においては、教材として好みを活用することが最も多かったが、特に作業学習など集団授業においては実施率が低かった。また、すべての指導場面に共通して、「授業開始のタイミングや課題の順序を本人が選択できるようにする」ことがもっとも実施率が低かった。好みを活用した指導に関する困難としては、「好みが個によって異なるために集団場面で活用しにくい」(70.1%)、「刺激が強すぎるために指導が難しくなる」(51.7%)などが挙げられた。

これらの結果から、好みのアセスメントとして面接と行動観察の組み合わせが多く実施されており、これは先行研究によって最も効率的であると指摘されているものであった。しかし、好

みを活用する際に生じる困難として挙げられた内容から、アセスメント方法がわからないことや、好みのものを活用した支援に対する誤解が生じている可能性が示唆された。

(4) 研究4

フリーオペラント条件では、A児は玩具を用いた一人遊びや室内を走り回るなどの感覚的な遊びに没頭しており、社会的行動がほとんど見られなかった。転がるおもちゃが好みのものであったが、セッションによって好みは変動していた。また、支援者の関わりに対して興味を示すことがなかったが、徐々に好みのものへの固執が見られるようになったため、要求場面を設定することとした。

そこで、機会利用型指導法を実施し、自然な文脈の中で支援者に対する要求機会を設定するため、要求することに必然性がある玩具として、A児の好みであって独力では遊べない風船やシャボン玉を中心に遊びに誘うようにした。その結果、拒否発語も多かったが、要求や参照視が増加し、支援者に対するクレーンなどの身体接触もできるようになった。発語頻度が増加し、楽しそうに遊ぶ様子が見られるようになった。これらの結果から、ASD 幼児に対して本人の興味関心に合わせて平行遊びとして関わるだけでなく、支援者が社会的行動の機会を設定し、好みに合わせて指導を実施することが重要であることが示された。

(5) 研究5

障害の有無や種別にかかわらず、子どもたちの多くがテレビやゲーム、動画鑑賞などをして過ごすことが多い結果が示された。一方で、小学生が行うスポーツ活動や他児との関わりのある遊びなどについて、障害のある子どもは少なく、主体的な活動を支援する場の設定が重要であることが示唆された。

<引用文献>

- 松下浩之 (2015) 発達障害児に対する好みを活用したアプローチ (日本特殊教育学会第 53 回大会自主シンポジウム話題提供要旨). 特殊教育学研究, 53 (5), 460-461.
- Reid, D. H., & Green, C. W. (2005) Preference-Based Teaching: Helping people with developmental disabilities enjoy learning without problem behavior. Habilitative Management Consultants, Inc., Morganton.
- 園山繁樹監訳・松下浩之・村本浄司訳 (2010) 発達障害のある人と楽しく学習-好みを生かした指導-. 二瓶社.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 松下浩之	4. 巻 14
2. 論文標題 重度知的障害のある子どもの好みを活用した指導を実施する際の課題の検討：学校教員を対象にした意識調査の分析から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山梨障害児教育学研究紀要	6. 最初と最後の頁 69-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34429/00004728	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松下浩之	4. 巻 56
2. 論文標題 知的障害や自閉症スペクトラム障害のある人への好みのアセスメントとその活用に関する研究の動向	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 特殊教育学研究	6. 最初と最後の頁 47-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.6033/tokkyou.56.47	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松下浩之・福本稜佑
2. 発表標題 小学生の放課後の過ごし方に関する調査 障害の有無および学校種における好みの活動の比較
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福本稜佑・松下浩之
2. 発表標題 小学生の放課後の過ごし方に関する調査 障害の有無に関連した保護者の評価およびニーズに関する検討
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松下浩之
2. 発表標題 知的障害のある子どもの好みを活用した指導に関する研究 特別支援学校教師に対する質問紙調査の結果からー
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----